

# 中世の都市における店舗の建築

後藤 治

Shop Architecture in the Medieval Japanese City

はじめに

- ① 絵画史料にみる初期の店舗
- ② 「洛中洛外図屏風」歴博甲本の店舗
- ③ その後の店舗の建築  
おわりに

## 【論文要目】

本論は、絵画史料をもとに、平安時代末から江戸時代初頭にかけての店舗の建築とその変遷について検討したものである。中世前半までの初期の店舗は、通りを意識した建築として、おもに既存の町家を改造する形で生まれたと推定される。商品として、は、食物・履物等の日用品を扱う店舗で、専門品を扱うものではなかつた。店舗は、時代とともに棚を常設化した専用建築へと変化したが、中世前半までは通りとの関係はそれほど強いものではなかつた。このため、鎌倉時代末には各地の都市で店舗がみられるようになつていたが、店舗が通りに面して軒を連ねる風景はみられなかつたと考えられる。それが最初に確認されるのは、一六世紀前半に描かれた「洛中洛外図屏風」歴博甲本においてである。歴博甲本にみられる店舗は、専門品を扱うものが多数を占めており、商品を並べる棚は大きく、棚の構造は仮設的である。この歴博甲本にみられる店舗や棚には、中世に市が通りにおいて行われるようになったことからの

影響をみるとができる。ただし、歴博甲本にみられる店舗や棚は、通りの市を常設化したものというよりもむしろ、商家が、往来との取引を意識して、契約の場の前にサインとして設けたものと考えられる。一六世紀前半から近世にかけては、商品を陳列する棚と契約の場を、通りに面した部屋で兼ねる商家が多くなる。これによつて、店舗の建築と通りとの密接な関係が確立し、近世の町家にみられる通りに面した部屋「ミセ」「ミセノマ」が生まれたものと考えられる。この変化によつて、店という語そのものが、商品を置く棚を意味する語から、建物の内部を指す語へと変化した。同時に、商人が契約に使う家屋であった商家は、店舗を併用する商店へと変貌した。